

IPUHS

vol.010
2023/03

通信



[特集]

地域とともに

■インタビュー:当事者の想いに応える子育て支援

看護学科 藤岡 寛 教授

■インタビュー:アイラボキッズ「子どもたちに科学や医療の体験を」

放射線技術科学科 鹿野 直人 准教授

■大学院研究

博士後期課程 神保 和正さん(作業療法学領域)

博士後期課程 小林 雅明さん(理学療法学領域)

■付属病院研究

付属病院におけるHybrid Assistive Limb®を使用した臨床研究の紹介

付属病院 リハビリテーション部理学療法科 高橋 一史さん

付属病院におけるリハビリテーション栄養の臨床研究

付属病院 岸本 浩 講師

■県立医療大学トピックス

■NEWS & INFORMATION

■藝游會 ■キャリア支援センター

■Coffee Break(看護学科)

藤岡 寛

Interview with
Fujioka Hiroshi

看護学科 教授

研究テーマの発掘

——本日は、看護学科の藤岡先生の研究テーマや取り組んでおられる地域貢献活動についてお話を伺いたいと思います。ところで、医療大にいらして何年になりましたか？

藤岡 5年半が経ちました。早いものですね。

——本学に着任する前、本学のどういった活動に特にご興味や関心がおありでしたか？

藤岡 大学院の教育に興味がありました。私の研究と大学院生の興味をコラボレーションして一緒に研究を楽しみたいと思っていました。

——先生はどのようなことに興味をもって研究をされてきたのでしょうか？

藤岡 自身は小児病棟の看護師として臨床経験を積む中で、疑問に思うところがあつた。例えば、割と年端のいった思春期前後のお子さんって、薬を渡したら素直に飲んでくれるんですね。説明して介助してなんとか飲ませるといふよりは、渡せばすんなりと飲んでくれるんです。でも、薬を飲むことについて彼らはどう考えているのだろうか？と思つたんです。——素直に治療に応じている子どもが何を

看護学科 教授

藤岡 はい。それである時、入院している子ども達に薬を飲むことにどう思っているのか聞いてみたんですね。そうしたら、薬を飲むことに対する葛藤を話してくれました。

例えば、薬を飲むと気持ち悪くなるから嫌だとか、飲まなきゃいけないっていうことは分かっているんだけど、薬を飲むと副作用で体毛が濃くなるし、太るから嫌なんだと打ち明けてくれたんです。

その時に、「看護師としては薬を飲んでもらうようにケアしないとだけれども、素直に応じる子どもの心の内をくみ取れていなかった」と気づいたんです。それが、「研究は大切なな、面白いな」と思つたきっかけだったと思います。

——今はどのようなことに興味をお持ちで研究に取り組んでいらつしやいますか？

藤岡 やはり、看護師がケアする対象者の心の内を、インタビュを通して明らかにする研究を続けています。対象者は障害を持つお子さんのお母さんだったり、お父さんだったり様々です。対象者が誰であれ、基本的にはその方が体験やその時の心の内を、インタビュを通じて知りたいと思つています。

——先生の研究ベースには、「ケアの対象になる方の思いを知りたい」という気持ちが強くなるんだなと感じました。大学院教育に関わる中で、ご自身の研究をベースに

した院生指導は行なえましたか？

藤岡 健康障害を持つ子どものきょうだいというテーマを選んだ院生がいました。その院生自身もきょうだいとしての当事者でした。健康障害がある家族をもつ子どもの体験を整理することができました。これまでの私の研究の指向性と院生の疑問を融合することができてよかったです。

当事者の心の内を聞く

ということ

——研究として相手の心の内を聞くとなると、インタビュの技術によって聞きとれる内容が違ってくるように思います。インタビュでご自身が気を付けていることや大切にしていることがあれば教えて下さい。

藤岡 大切なことは、謙虚であることですね。自分は研究者だから傲慢な態度をとつてもよいとはさらさら思つていませんが、もしかしたら、過去のインタビュ経験や論文から得た情報によって、「私はそれを知っている、分かっている」といった態度をとつてしまふかもしれない。そういう態度にならないように、インタビュの時には謙虚でいたいと思います。また、

私が、「何でも聞きたい、何でも聞くよ」といった前のめりな姿勢でいると、結局、心を閉ざされちゃうこともあります。ですから、対象者の方が話したい、話せる思いとか心情を尊重して聞かせていただくという態度で聞くのが大切かなって思っています。

——インタビュを使った研究を行った大学院生に、インタビュの指導やコツなどはアドバイスされましたか？

藤岡 本学の大学院生はすでに看護師として実践経験があるので、よほどのことがない限りは、対象者との関係づくりはできていらつしやる方が多いですね。本人が取つてきたインタビュのデータを見ると、ちよつとうまくできなかったというのは分かります。そんな時は、院生とインタビュを一緒に振り返って、これから、次の対象者の方にはどう聞いたらいいかみたいなことを一緒に考えて、具体的にアドバイスしています。

——やはり臨床で培われる経験に基づく能力はすごいですね。

藤岡 そう思います。学部学生も卒業研究でインタビュを行うことがあります。臨床実習にも行つていますが、やはり現場で場数を踏んだ看護師とはインタビュ時の関係づくりが違うんですね。ですから、学部学生が、患者さんとか患者さんご家族にお話を伺いたいというときは、私も一緒に立ち会つて、フォローができるように関わっています。

当事者の思いに込める

地域活動

——インタビュ結果を研究としてまとめ、当事者の方の思いが明らかになると、看護師として何をしたらいいのだろうか？と考えるようになると思います。藤岡先生は、地域貢献も積極的に行動していらつしやると伺いました。どのような活動をされていますか？

藤岡 私は7、8年くらい前に、「トリプルP」という前向き子育てプログラムのファ

シリテーター資格を取りました。その資格を生かして、お母さんとかお父さんと前向きに子育てするためにどうしたらいいかについて話し合うグループワークを開催しています。

——子育てをする当事者の思いに応える活動ですね。

藤岡 子どもに病気や障害があるかどうかに関わらず、子育ては前もって用意周到に準備できることじゃないんですよ。そして、子育てに際して悩みが全くないって人は多分いません。トリプルPでは、お母さんやお父さんが子育てに関する悩みを話し合う機会を設けています。前向き子育てプログラムなので、こちらがお話しをしたり、ロールプレイをすることもありますが、基本的には子育て当事者が互いの思いを共有するピア活動を続けています。

——当事者が互いの思いを共有することを大切にされているのはなぜですか？

藤岡 かつては大家族で、いろんな人から生活の中で子育てを教えてもらうみたいなところがありました。子ども時代から自分より小さな親戚の子どもの子守をすることで子育てのトレーニングが行われていたと思います。しかし、最近ではそういった子育ての準備機会が減っています。ですから保護者に対する子育てトレーニングが必要だなどと思い、前向き子育てプログラム（トリプルP）のファシリテーター資格を取りました。

——ところでトリプルPの“P”って何ですか？

藤岡 英語のPなんです。前向き子育てプログラムって、Positive Parenting

Programで、Pが三つ並ぶのでトリプルPです。トリプルPでは過去の子育てに関する研究知見が支援プログラムとしてパッケージされています。例えば、子どもを怒鳴ったり、叩いたりして教えるのではなく、子どもができたことをその場で具体的に褒めるといったことです。

トリプルPを使った地域貢献活動と今後の展望

——藤岡先生はトリプルPを使った活動をどこでされていますか？

藤岡 これまでにつくば市、神栖市といった茨城県の諸地域でやって来ました。ある地域では、人が集まらなくなって残念ながら実施できなかったということがあります。——こういった理由から、実施することが難しかったのでしょうか？



藤岡 トリプルPはパッケージとしてプログラムの内容が決まっています。1回が2時間で全8回もあるんですね。1週間に2回やって2ヶ月間も通うとなると、子育ての方にとっては実際のところ大変です。また、トリプルPという名称もやや堅苦しい。私自身も参加者だったら、1週間2回2時間決まった時間に集まるというのは心理的にも体力的にも大変だと感じると思います。ですから、最近はそのような当事者の事情にあって、1・2回で済む短縮版のプログラムを開催したいと考えています。

——医療全体が予防に向かっていきますよね。治療ではなくて予防。そうすると、子育て支援も、予習的というか準備的活動が重要になってくる気がします。

藤岡 そう思います。前向き子育てプログラムの内容も、大きく2つあるんです。前向きに子どもを育てる方法の学習と、具体的な困りごとへの対応です。私が当初やっていたのは、後者の活動でした。ですから皆さん、子どもが困った行動をする時にどうやって対処するかを聞きたいっておっしゃるんです。でもこのプログラムでは、子育てに際して前向きな関わりをして、困ったことが起こりにくくなることを目指しているんです。ですから、困ることが起こる前に子育ての準備をすることが大切なんです。子育ての問題で本当に困るのは、虐待に発展してしまうことです。虐待を解決するのではなく、そもそも虐待が起きないようにする親子の関わりを広めていきたいと思っています。その点において、このプログラ

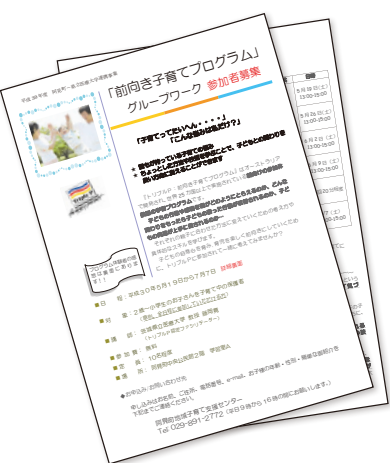
ムはよくできていると思います。——準備、予防となるとたくさんの方が気軽に参加できるプログラムである必要があります。そうすると、やはり先生が考えていらっしゃる短縮版のプログラムがとても大切になりますね。

藤岡 そう思います。短縮版のプログラムは必要だと思いますよ。

——実現できたら、困りごとを抱える人が減っていく可能性がありますよね。ぜひ実現させて広がってほしい活動だと思います。これからはどんな活動展開を考えていらっしゃいますか？

藤岡 私は阿見町の子ども・子育て会議の会長を仰せつかっています。ですから、まずは大学がある阿見町の子育て支援、子育て政策とタイアップをして、子育て支援の中に前向き子育てを加えていけるといいなと考えています。

——今回お話を伺い、藤岡先生の謙虚な姿勢の中にある子どもや子どもに関わる方達への熱い思いを感じました。これも、インタビューしなければ気づかなかった、藤岡先生の心の内だと思いました。



鹿野直人

Interview with Shikano Naoto

放射線技術科学科 准教授

本学に赴任して25年

—— 本日は、放射線技術科学科の鹿野先生に、現在取り組んでおられる研究や地域活動をご紹介いただきたいと思っております。先生は、本学に赴任されてから、どれぐらいたちますか？

鹿野 早いもので25年ぐらいたっています。—— 本学の創立は27年前なので、開学に近い時期からいらつしやるんですね。

鹿野 そうですね。本学の学部の二期生と一緒に、この大学に来たという感じになります。

—— 当時はこの大学に対して、どういう思いを持たれていましたか？

鹿野 最初に本学に来たときの印象ですけれども、常磐線で最寄駅の荒川沖に降り立ったときに、実に空気がおいしいと感じました。本学は、かつてドイツのツェペリン号という飛行船が飛来した広大な飛行場の跡地にあるということで、緑も多くて霞ヶ浦も近いし、それから豊かな自然の中で、やっぱり教育とか研究するには、すごくいい場所だなというふうに感じました。開学間もない頃だったので、いろんな先生方と、学生と、それから職員の方と、病院とも一緒に活動して、創り上げていけたらなと気持ちがありました。

核医学研究とアイラボキッズ

—— そのような環境の中で、先生はどういった領域の研究をされているのでしょうか？

鹿野 診療放射線技師の専門領域はすぐ広がって、その中で核医学というのがありますが、核医学の放射性医薬品というものに、すごく興味を持って取り組んできていました。

どっちかという化学寄りの学問で、標識化合物を合成したり、それを使ってマウスで体内分布をとるなどの実験をしたりして、がんの診断薬とか、脳機能の診断薬とか、心臓の機能とか、そういうのを見るための創薬みたいな感じの研究内容ですね。

—— 一方で、鹿野先生は地域貢献的な研究もされていると伺ったことがあるのですが、どのような活動、研究をされているのでしょうか？

鹿野 医療と科学を中心に、実際に子どもたちが体験をして学ぶような、「アイラボキッズ」という体験教室というのを開いております。アンケート調査などを通して、どういう内容にしたら楽しめるのかなど

いうことを研究しています。—— 体験教室でありながら、どういうふうなやり方をしたら学びが深まるかとか、楽しくできるかっていうこともご研究されているんですね。

鹿野 研究としては、そうです。

—— 放射線を利用した核医学や創薬的なご研究もされつつ、一方で、医療と科学を結び、体験できるような、主にお子さんを対象とした研究もされている。

鹿野 そうですね。今は小学生ですね。

—— 主に小学生を対象とした、フィールドワーク的な研究もされているということなんですが、これらは先生の中では、どのような関係にあるのでしょうか？

鹿野 子どもたちは、専門家、大学とか研究所の専門家に接したときに、すごくその領域に興味を持って、やがて自分たちが大きくなったときに、自分の将来の選択肢として、そういうのを選んでくれるっていうようなことが、どうもあるらしくて。

それからいくと、例えば僕なんかだったら、放射線であるとか、科学であるとか、そういうことをみんな楽しい、こういうのが楽しいんだよっていうのを伝えることで、

科学とか医療の方向に進んでもらえるんじゃないかということも期待してやっています。

アイラボキッズの活動

—— それでは、先生が主催されている「医療と科学の体験教室…アイラボキッズ」について、具体的に紹介いただけますか？

①霧箱の観察

鹿野 これは僕の分野、レントゲンに関するものです。「霧箱の観察」。これは割と、いろんな小中学校、高校でもやられているものなんです。

—— そうなんですか。初めて聞きました。

鹿野 自然放射線でも霧箱を使うと、例えば、電子が飛んだ軌跡とか、アルファ線が飛んだ軌跡とかを霧箱というので見ることができます。目に見えないものをどうやって見るか。飛行機雲みたいな形の放射線の飛程のようなものが見られるんです。

—— 放射線に関係した分野で、まさに医療的な体験ということですね。

②ビー玉顕微鏡づくり

鹿野 そうですね。あと、「ビー玉顕微鏡づくり」は、うちの大学の夏休みの親子教室でもやっているものですが、これも非常に面白くて。このときは、当時人間科学センターにいらした大西先生に講師をお願いしました。これ、ものすごく原始的な原理なんですけど、レーウエンフックのビー玉顕微鏡って、200倍とか300倍とか出るんですよ。

—— そんなに！

鹿野 普通の顕微鏡でも高倍率を出すには、



霧箱の観察



昆虫採集

油浸したり、いろいろしくちやいけな
わけですけど、これは簡単な原理ででき
ています。

——それで、とても高倍率のものができ
たら感動しますね。

③自然放射線の測定

鹿野 いいですよ。それから、また放射
線のものですけど、自然放射線を測るとい
うテーマで、3・11の大地震があつてから
割とみんな、放射線に関して興味、関心が
出てきましたよね。シーベルトっていう単
位で直接測れる線量計があるんですが、阿
見町の小学校の校庭をいろいろ測りました。
町としても放射線を計測しているんですが、
その値と合っているかどうか、一番自然放
射線が高い所はどこかとか、低い所はどこ
かなんていうのを見たりして、安全を実感
してもらおう活動です。

——この活動自体は11年前に起きた福島
の原発事故とは直接関わりなく、放射線の測
定ということになされているんですか？

鹿野 そうですね。もう子どもたちは3・

11を体験していない
ですよ。若いので。

——たしかに小学生で
すもんね。

鹿野 でも、その影響
とかも多少残っていた
りするっていうのもあ
りまして。子どもさん
の方が身長が低いので、
よりその地面からの放
射線の影響を受けるん
じゃないかということ
を結構心配していた方
がいらっしやいました。

——それを自分たちで測定して、大丈夫だ
なと実感して安心して遊べるといいです
ね。

④救急蘇生体験

鹿野 そうですね。あと、救急蘇生体験は
医科学センターの角先生に講師をお願い
して実施しました。

——蘇生体験とは、まさに医療の体験です
よね。

鹿野 はい。こういうのに興味を持って
らつて、うちの大学にもたくさん来てくれ
るといいなと思っています。

——最初に先生がおっしゃっていた医療の
専門家と触れたり実際に体験したりして、
将来のロールモデルの一つになつてもらえ
るという意味合いがありますね。

鹿野 AEDを使ったこの蘇生体験をした
後に、例えば小学校のどこにAEDがある
とか、町内のどういふところにAEDがあ
るかとか、そういうアイデアを例えば夏休
みの自由研究とかでやつてくれる子が出
たらしいなとかいう思いもあつて、企画し
ました。



救急蘇生体験(AED)



茨城県立医療大学の強み

——こうした活動を本学の地域貢献研究な
どを含めた様々なバックアップを受けなが
らされているわけですが、先生が研究や活
動を進める上で、本学、茨城県立医療大学
の強みとしてお感じになることはありま
すか？

鹿野 まず、大学の特色とか立地ですよ
ね。ちょっと考えてみると、まずこの大学
は、研究施設設備が非常に充実しているな
というのがありまして。僕の出身は本学同
様の公立大学で、技師の免許を取つたのは
そこなんですけど、もつとこぢんまりしてい
るんですよ。研究仲間がいる地方の国立大
学に行つても、割とうちの大学みたいに充
実した施設設備、研究用の設備があるところ
つて、あんまりないような気がするんです
よね。ですので、そういう面が非常に良
いということと、あと、立地ということか
らすると、大学とか研究所とか博物館とか
会社とか病院とか、非常にこの県南に集中
していて、うちの大学の周りにたくさんあ
り、コラボしやすいということがありま
すよね。

もう一つは、筑波山とか霞ヶ浦とか、そ
れから、海に面した県であるということか
ら、非常に自然に恵まれているっていうこ
とがあり、フィールドワークとかはしやす
いかなと思います。

さらに重要なのは、アイラボという機材
のそろつた部屋がうちの大学にはあるとい
うことがすごく大事で、医療関係の体験を
するには、この部屋を使うのがすごく役に
立つな、ありがたいことだなと思います。

——まさにアイラボキッズですね。

鹿野 あとは付属病院もあるし、それから、
大学にはいろいろな専門の先生がそろつて
いるし、学部から大学院までの学生、卒業
生もたくさんいるという環境を活かさない
手はないと感じています。それが強みだと
思います。

——有機的にコラボレーションできたら、
アイラボキッズの活動も多様なプログラム
になり、いろんなロールモデルを示すこと
ができますね。

鹿野 楽しみです。

子どもたちに向けて

——インタビュ어의最後に、茨城県の子ど
もたちに向けて、一言お願いします。

鹿野 茨城県は、ほかの県と比べると医療
に携わる人が少なめなので、ぜひアイラ
ボキッズで体験してもらつて、医療や科学
の分野に、たくさん皆さんの皆さんが進んでくれ
ることを期待しています。医療や科学に興
味を持ったなら、ぜひ茨城県立医療大学に入
学してください。

博士後期課程 作業療法学領域

神保 和正さん

指導教員：白石英樹教授
JIMBO Kazumasa

— 研究をはじめたきっかけは何ですか？

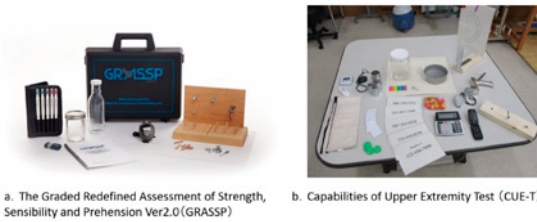
私は、大学を卒業してから千葉県千葉市ハビリテーションセンターで作業療法士として働いています。その中でも私は脊髄に損傷を負われた方（脊髄損傷者）に特化した医療・リハビリテーション（リハビリ）を行う部署に配属され、今年で8年目になります。私は、もともと脊髄損傷者へのリハビリや研究に関心を持っていました。特に脊髄損傷者の日常生活や余暇活動に多大な影響が出る肩や腕・手指の動きや物品の操作性（上肢機能）の障害に関心を持っていました。しかし、実際に病院で行うリハビリや研究場面で、頸髄損傷者の上肢機能の障害を詳しく評価できる手段がありませんでした。そのため、リハビリを受けたことによる効果や新たな治療法の効果の証明が十分にできない難しさを感じていました。そこで、「しっかりと脊髄損傷者の上肢機能（腕や肘、手指の動きや操作性）を評価できる手段があると、臨床治療やリハビリ訓練、研究がより発展するのではないか」という考えを持つようになり、大学院での研究を志しました。

— 具体的にはどのような研究をしていますか？

私は博士前期課程において、海外で普及してきている、頸髄損傷者の日常生活活動の動きに特化して上肢の機能を評価で

きる「Capabilities of Upper Extremity Test (CUE-T)」という評価法が、日本の病院でのリハビリや研究場面で使用できるのかについて研究・検証してきました。博士後期課程では、このCUE-Tの項目をより細かく分析し、頸髄の損傷によって障害を受けた上肢の動きや物品の操作能力を簡単なものから難しいものへと順序付けを行うことを主軸に研究を行っています。この研究によって、上肢機能の障害のより詳細な重症度が分類でき、日常生活での動作・操作性を再獲得するための目標設定やそのためのリハビリ訓練内容をより綿密に計画する際に役立てることができるよう研究を行っています。

近年、再生医療など脊髄損傷の治療が大きく変わってきています。近い将来、多くの臨床や研究場面でこのCUE-T評価法が使用され、脊髄損傷治療の発展に貢献できるようになることが大きな目標です。



a. The Graded Redefined Assessment of Strength, Sensibility and Prehension Ver2.0 (GRASSP) b. Capabilities of Upper Extremity Test (CUE-T)



- CUE-T, mCUE-T-Jを一部抜粋
- ・30秒間に手を前、上、下に伸ばす回数。
 - ・握力やつまむ力。
 - ・つまむ、押すなどの指先の使用動作。
- など、計17項目行います。

博士後期課程 理学療法学領域

小林 雅明さん

指導教員：富田和秀教授
KOBAYASHI Masaki

— 研究をはじめたきっかけは何ですか？

私は筑波メディカルセンター病院で理学療法士として勤務しています。大学院での研究課題は、呼吸器の病気で入院された方は、呼吸をする筋肉がとて弱っています。息をするだけで大変そうでした。手足の筋肉と同様に、呼吸筋も鍛えることができました。呼吸筋を鍛える方法として、息を吸ったり吐いたりする時に抵抗がかかる専用器具を口に咥える方法があります。しかしこの方法では、私が担当した方の様に呼吸筋の力が弱くなり過ぎていた方には負担が大きすぎました。そこで、呼吸筋がより効果的に利用される方法を研究したいと考えました。

— 具体的にはどのような研究をしていますか？

呼吸に関する筋といえば横隔膜ですが、私は肋骨と肋骨の間にある肋間筋に注目しています。肋間筋には一定の振動刺激を与えると強く働く「緊張性振動反射」が存在します。ある研究で、「振動刺激を胸の前」に与えると「吸う」運動が高まり、胸の「横」に与えると「吐く」運動が高まり、結果的に呼吸が増幅される」ことが報告されました。しかしこの報告では、左右の胸の「前」と「横」にそれぞれ1部位ずつしか刺激を与えていませんでした。私は、

「刺激する部位を増やしたら、呼吸が増幅されてもっと効率的に楽に呼吸をすることができるのではないか？」と思い、刺激を与える位置や数に関する研究を進めています。振動刺激の有用性がわかれば、呼吸筋の力が低下した方がより楽に生活できる機器の開発等に役立てることができると思い研究を進めています。



付属病院におけるHybrid Assistive Limb® を使用した臨床研究の紹介

付属病院 リハビリテーション部理学療法科 高橋 一史

Hybrid Assistive Limb® (HAL®) は筑波大学の山海嘉之教授らによって開発された世界初の装着型サイボーグです。HAL®は筋肉が活動を行う時に生じる微弱な信号を捉えて、その信号情報などを基にモーターを駆動します。運動障害など身体の動きが不自由な方が装着すると、より容易に起立練習や歩行練習を行う事が出来ます。

HAL®は8つの神経筋疾患に対する歩行運動処置として、日本の公的医療保険の適応となりました。また、ドイツやアメリカをはじめ、各国で導入が進んでいます。

茨城県立医療大学付属病院では平成22年よりHAL®の臨床研究を開始し、神経筋疾患、脳血管疾患、脊髄損傷、整形外科疾患、小児疾患といった様々な疾患の方に装着して練習を行いました。現在までに延べ244名、総実施回数は2600回を超えています。また、学会発表は国内・国際学会を合わせて20件、論文掲載は国内・国際誌を合わせて15件に上り、得られた研究成果を積極的に公表してまいりました。現在は国内治験「小児脳性麻痺等に伴う立位・歩行障害を主体とした運動姿勢障害に対する粗大運動能力の向上効果を検証するための生体電位等で随意コントロールされた装着型サイボーグHAL®に関する医師主導治験・多施設共同ランダム化並行群間比較試験」に参加しています。



HAL® 医療用下肢タイプでの歩行練習の様子
装着者の腰部から下肢にかけてHAL®を装着し、歩行練習を行います。理学療法士は後方に位置してHAL®を軽く把持しています。

HAL®を使用した臨床研究に関するお問い合わせは、左記までお願いします。
TEL: 029-1888-9200 (代表)
茨城県立医療大学付属病院
リハビリテーション部理学療法科

近年では、起立動作や歩行動作に主眼を置いたHAL® 医療用下肢タイプの他にも、肘・膝等の個別の関節への装着が行える単関節タイプ、起立練習に特化した腰タイプと様々なタイプが開発され、幅広い練習が可能となりました。リハビリテーションに励む多くの方々の機能回復に寄与できるよう、日々研究を続けています。

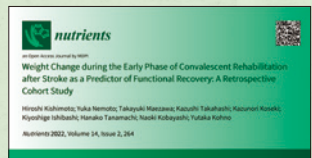
付属病院におけるリハビリテーション栄養の 臨床研究

付属病院 講師 岸本 浩

最近のリハビリテーション医学のトピックスの一つとして「リハビリテーション栄養」という言葉が挙げられます。スポーツの世界でもトップアスリートは栄養学上手に利用して成績を上げていますが、リハビリテーションにこうした考えを導入したもの、と考えていただくと思いがちかと思えます。その定義については成書に譲りますが、核心は「リハビリテーションと栄養を同時に考えたケア・支援を実践すること」で対象者のQuality of Life 向上を目指すもの（藤原2020）だと考えられます。

茨城県立医療大学付属病院はリハビリテーション専門病院として、脳血管障害、脊髄損傷、外傷、小児、神経難病等の専門的リハビリテーションを提供しており、一人一人の患者さんについて医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士、ソーシャルワーカーなどからなる担当チームが支援する体制になっていますが、それぞれのチームが「リハビリテーション栄養」の考え方も取り入れてリハビリテーションを実践しています。この実践の中で、こうしたらもつと機能回復が図れるのかという臨床的な疑問を持ち、これまでに付属病院でリハビリテーションをされた方々のデータを見直す観察的な臨床研究がいくつか行われています。

令和4年1月には付属病院の有志「リ



Nutrients 2022, Volume 14, Issue 2, 264
Weight Change during the Early Phase of Convalescent Rehabilitation after Stroke as a Predictor of Functional Recovery: A Retrospective Cohort Study
https://www.mdpi.com/2072-6643/14/2/264



ハビリテーション栄養研究チーム」の研究結果 “Weight Change during the Early Phase of Convalescent Rehabilitation after Stroke as a Predictor of Functional Recovery: A Retrospective Cohort Study (機能回復の予測因子としての脳卒中後回復期リハビリテーションの初期段階における体重変化…過去起点コホート研究)” というタイトルの論文が国際的な栄養学雑誌Nutrientsに掲載されました。脳卒中回復期リハビリテーション初期の体重維持増加が、退院時のより良い機能回復と関連する（BMI 30以上の肥満症の方を除く）、という結論で、リハビリテーションにより増加する消費エネルギーを常に考慮し、十分なエネルギー摂取が行われるよう各患者担当チームによる栄養サポートが必要である、と考察しています。今後もこうした「明日からのリハビリテーションに役立つ臨床研究」を日々のリハビリテーションと並行して行っていきたいと考えています。

ドイツ・ボーfum健康科学大学 視察報告

令和4年8月に松村明学長を含め本学の教員6名がドイツ連邦共和国ボーfum健康科学大学（Hochschule für Gesundheit）に訪問しました。

茨城県立医療大学とボーfum健康科学大学は、令和3年に国際交流に関する覚書を締結し、これまでオンライン会議などを続けてきましたが、本視察で初めて対面交流が実現されました。滞在中は、ボーfum市庁舎にてEiskirch市長主催のレセプションに参加する機会にも恵まれました。

訪問団は、大学および関連施設を見学し、双方の教育システムやプログラム等について意見交換を行いました。また、今後の共同研究やさらなる交流の計画等をともに検討し、将来につながる視察となりました。

さらに滞在中は、教員の専門に応じた視察も実施しました。看護学科所属で助産師の教員（加納尚美教授、山海千保子准教授、山波真理准教授）は、地域の助産施設を訪れ、現地の助産師と出産前後の環境や支援体制について意見交換を行いました。また、作業療法学科（木口尚人助教）は、退院後の生活を見据えた住環境のあり方や自具具について意見交換を行いました。松村学長と倉本尚美准教授（情報学）は同市のベルグマンズハイル労災病院を

訪問し、医工連携研究に関するミーティングを行うと共に、同敷地内にある装着型サイボーグHAL[®]を用いたリハビリ施設（Cyberdyne Care Robotics GmbH）を視察し、リハビリに取り組む患者から感想を聞くと共に、現地スタッフと情報交換を行いました。

今後のさらなる交流や協力体制につながる視察訪問となりました。



科学技術振興機構(JST) さくらサイエンスプログラム

ドイツ・ボーfum健康科学大学 招へい

JST「さくらサイエンスプログラム（SSP）」に本学の企画・提案が採択されたことにより、ドイツ・ボーfum健康科学大学の職員1名及び学生等8名の計9名を招へいし、令和4年10月17日（月）～23日（日）の延べ7日間、本学にて、招へい研修を行いました。

ボーfum健康科学大学の4学科（看護学科、助産学科、理学療法学科、作業療法学科）から各2名ずつ計8名は、本学教員の熱心な指導を受け、日独の医療技術の比較や日本独自の医療等を学ぶことができました。

さくらサイエンスプログラムの成果発表会・修了証授与・意見交換会では、ボーfum健康科学大学4学科の研修生の成果発表が英語で行われ、研修を通じて得られたこと、ボーfum健康科学大学の各学科紹介、本学の教育、日独の教育及び各専門教育の違い、

日本文化及び日本の印象、将来に向けた交流の提案等の発表がありました。

松村学長からさくらサイエンスプログラム修了証の授与後、意見交換会では、本学の教員や学生たちとの熱心な交流により、楽しい時間を過ごすことができました。

さらに、22日（土）には、本学の学園祭である創療祭にも参加し、ボーfum健康科学大学やドイツでの教育の紹介後、学生交流会では、本学学生との交流を深めました。最後に、今後の学生間の交流や友情を誓い、本学のさくらサイエンスプログラム研修を無事終了することができました。

本学とボーfum健康科学大学と相互交流や共同研究を通じて、日独医療の発展に寄与が期待される大変有意義な研修となりました。



3泊4日の夕張での地域多職種協働実習

令和4年9月13日～16日で学生11名が参加する夕張市での地域多職種協働実習を実施しました。本科目は今年度から始まったIPEに関連する選択科目です。夕張市は以前は炭鉱で栄えていましたが、平成19年に財政再建団体となり、現在再建に取り組んでいます。高齢化率は50%を超え、町並みはシャッター街が並ぶ一方で炭鉱労働者用の大規模な社宅が残っていたり、夕張映画祭のポスターがあつたりと街の繁栄を残しています。市内の夕張市立診療所では、前沢政次医師を中心に地域包括支援の体制を作っています。

JR新夕張駅に各自で集合することから始まった実習は学生自らが計画を立案し、夕張市及び夕張市立診療所から提供いただいた実習フィールドである医療・保健・福祉現場での住民活動の実際や診療所での医療職間カンファレンスに参加しました。地区のサロンでは90歳ほどの会長から炭鉱時代の生活と今の生活、冬の過ごし方についてお話をいただいたり、複数件の同行訪問を体験したり。元炭鉱労働者やその家族の方々は大変明るい気質であり、学生の来訪を心から歓迎してくださいました。また、専門職の方

から協働についてお話を伺う「語りの会」は学生にとっては今後の貴重な糧になると思われます。3泊4日の合宿はあっという間に過ぎ「楽しかった」という学生の声が大変印象的でした。



現場の活動に見聞を深めた「専門職との語りの会」の風景

県立医療大学トピックス

令和4年度にあったできごとをピックアップしてご紹介します。

国際多職種協働実習(高雄医学大学との交換留学)

本学は、台湾の高雄医学大学(Kaohsiung Medical University: KMU)と国際連携協定を締結し、短期交換留学を行っています。コロナ禍での2年間は、この国際交流は中止されていましたが、令和5年1月10日～2月8日の間でKMUの学生9名が来学し再開しました。1ヶ月の滞在中に、本学の学生や教員と一緒に車椅子バスケットボールを体験したり、日本食を作りながら日本文化を五感で感じたり、実習科目・演習授業への参加や学外施設見学など様々な体験ができたようです。

本学の学生においても、令和5年3月に国際多職種協働実習として約10日間、KMUを訪問する予定です。台湾では、様々な活動を積極的に行うことを期待しています。



シミュレーション教育の様子



車椅子バスケットボールの様子

令和4年度新規着任・昇任教員

渡辺 忍	4月1日昇任 (准教授 看護学科)	石山 すみれ	8月1日着任 (助教 医科学センター)
阿部 準子	4月1日着任 (助教 看護学科)	山本 潤	9月1日着任 (助教 看護学科)
石井 大典	4月1日昇任 (准教授 作業療法学科)	布施 拓	9月1日昇任 (講師 放射線技術科学科)
安江 憲治	4月1日着任 (助教 放射線技術科学科)	郡 倫一	9月1日着任 (助教 放射線技術科学科)
内田 敦子	4月1日着任 (教授 人間科学センター)	宮川 真	9月1日着任 (助教 放射線技術科学科)
佐伯 紗希	4月1日着任 (講師 付属病院)		

令和4年度定年退職教員 ～長い間、本当にありがとうございました～



放射線技術科学科教授
佐藤 斉

在職中は皆様に一方ならぬご懇情を賜り、誠にありがとうございました。おかげさまで定年を迎え退職することとなりました。やりがいのある仕事に従事することができ、教職員の皆様や学生をはじめ、多くの方々との出会いがありました。私を導いてくださった先輩方や、支えてくださった皆様にあらためて心から感謝申し上げます。社会の状況も変化が大きい昨今ですが、大学のさらなる発展と、皆様のご健勝とご活躍をお祈りいたします。



人間科学センター教授
岩井 浩一

茨城県立医療大学には開学準備室から関わってまいりましたが、いよいよ定年退職を迎えることとなりました。初代学長岩崎洋治先生が、「卒業生を私の宝物として社会に送り出すことが私の夢でした」と記されたことを胸に、その思いを引き継いでこれまでやってきたつもりです。本当にやりがいのある仕事を与えていただいたことに感謝申し上げます。最近、卒業生の皆さんが活躍している姿を見るのが大きな喜びでした。益々のご活躍をお祈り申し上げます。



人間科学センター教授
Parry Niel David

My time over the past 27 years at the Centre for Humanities and Sciences has been one of both great pleasure and many challenges, and I would like to thank colleagues past and present for their constant support and encouragement. Personally memorable is first, as *komon* to the wind orchestra, tennis and futsal circles, having had the opportunity to enjoy playing music and doing sports together with many students. Also, as chairman of the Committee for International Exchanges, it has been an honour to have helped in developing our ongoing links with staff and students at Kaohsiung Medical University, Taiwan. My best wishes go to the students, old boys and girls, and staff of the university for all their endeavours, now and in the future.



医科学センター教授
山口 直人

前日までの急性期病院勤務医からの急転直下、本学赴任初日からの学務副委員長、文科省特色G P 責任者、学修センター長、保健室長。その後は共通コアカリ編集、博士課程開設支援、医科学センター御用聞き長、付属病院長との週1回総回診等、本当に充実した、実は楽しい18年間でした。現在は研究科長として暗中模索の最中ですが、皆様にとって少しでも快適な教育研究の環境作りができればと…オッと定年退官でした。しばらくは生き霊として近辺を浮遊しているかも？今後ともよろしく！長年の御厚情、心より感謝！医療大学の益々のご発展を。



医科学センター教授
山川 百合子

茨城県立医療大学では1998年から付属病院の非常勤医師として6年間、2004年から医科学センター教員として19年間勤務させていただきました。1期生の学生から出会い、毎年その成長ぶりに驚かされるばかりでした。また精神医療以外のたくさんの分野の先生方にも出会い、研究や臨床の幅も大きく広がりました。さらに大学内の全員の皆様に助けられて、何とか定年を迎えることができました。本当にありがとうございました。



茨城県立医療大学同窓会

藝游會

Alumni Association

◆第7回卒業生交流セミナーの開催報告

令和4年度の卒業生交流セミナーは、本学看護学科教授 加納尚美先生と元本学看護学科教授 市村久美子先生をお招きし、令和4年3月24日にZoomによるオンラインで開催しました。テーマは、「茨城県立医療大学のこれまでとこれからの看護」で、加納先生にはIPEの話を中心に、市村先生にはヘルスプロモーションの話を中心にご講演いただきました。講演には、90名以上の方にご参加いただき、大学時代を思い出しつつ新たな学びにもつながる良い時間となりました。

◆「藝游Vol.22」は大学ホームページからご覧になれます。

各期の幹事の皆様より原稿をお寄せいただいております同窓会報「藝游」が本学ホームページにアップされています。下記のURLまたはQRコードからご覧ください。写真等が多数掲載されておりますので、別紙でお届けしておりますパスワードの入力が必要となります。

https://www.ipu.ac.jp/cms/wp-content/uploads/2022/03/geiyu_vol22.pdf



Old professor occasionally die, but their mind never fades away from your hearts.

(年取った教授は去るが、その思いは皆さま方の心の中に)



◆岩崎信明教授の最終講義が行われました。

6月末を以てご退職される前付属病院長の岩崎信明教授（医科学センター）の最終講義が令和4年6月15日（水）に開催されました。「小児神経学とリハビリテーション」のテーマでお話いただきました。卒業生を含めて、多数の出席をもって、盛大に執り行われました。ご定年退職を迎える5人の先生方にも大変お世話になりました。

◆寄付事業「つなげよう！ IPUHS支援基金プロジェクト」

昨年度より大学と連携して始動しました在学生の経済的影響に対する支援「つなげよう！ IPUHS支援基金プロジェクト」ですが、令和4年8月25日現在の寄付金額6,122,100円のご寄付を賜りました。残金約78万円は、学生のPCR検査等の支援に充てさせていただきます。ご寄付をありがとうございます。

お問い合わせ

会長 橘 香織 (PT1期生) 茨城県立医療大学理学療法学科准教授
E-mail: tachibana@ipu.ac.jp

キャリア支援センター

今年度の活動報告

今年度はインターンシップを再開した医療機関等もあり、面接試験は9割以上が対面で行われました。キャリア支援センターでも、外部講師を招き対面での就活講座を開催しました。7月には「キャリアタスUC」を導入し、新卒向けの求人情報をリアルタイムで提供できるようになりました。

◆キャリアタスUCの導入

7月より求人システム「キャリアタスUC」を導入しました。求人票を紙面管理からオンライン化することにより、学外からもリアルタイムで学生が求人を閲覧できる環境を整えました。今後も施設等にキャリアタスUCの活用にご協力いただきながら、よりスムーズな情報提供を実施します。

◆マナー講座の開催

8月にANAビジネスソリューション（株）より講師を招き、「マナー講座」を実施しました。医療現場での接遇とマナーや、挨拶の仕方・お辞儀の角度や立ち振る舞いなど、所作も含めて学ぶことができた講座でした。学生のアンケート結果では「すぐに役立つ・将来役立つ」という回答が91%でした。



◆4年生夏の就活講座

(株) マイナビより講師を招き、履歴書の作成や小論文・筆記試験対策講座を開催しました。また、面接練習講座では、学生自身も面接官役



を経験し、様々な視点でお互いにアドバイスし合いながらグループワークを進めることができました。

◆就職説明会の開催

3月「看護学科就職説明会」、6月「放射線技術科学科就職セミナー」、8月「作業療法学科就職説明会」をオンラインで開催しました。多くの医療機関等の皆様が参加していただき、学生からは「それぞれの医療機関に必要な人材について改めて知ることができた」という感想がありました。

～卒業生の支援も行っています～

大学には県内医療機関をはじめ、多くの求人があります。Uターン就職等、相談を希望される方は下記お問い合わせ先までご連絡ください。

お問い合わせ及び就職相談申込先

茨城県立医療大学キャリア支援センター

Tel. 029-840-2109

E-mail: career@ipu.ac.jp

業務時間: 8:30 ~ 17:15 (土日、祝日を除く)

Coffee Break

今年は創療祭がついに対面で実施されました。待ちに待った対面での開催でした。これまではコロナ禍のため開催が自粛されていましたが、3年ぶりの開催です。大学のキャンパスに学生の姿があるのはとても自然で、創療祭の活気もあり、「やっぱり大学っていいなあ〜。こうでなくては!」と思える光景でした。

よくショッピングセンターなどでイベントをやっている場面に遭遇します。その目で確かめなくても、その演奏がCDなどの音源ではなく生演奏なのは、なんとなくわかりますよね。生の音楽は、スピーカーから流れて来るものとは音圧もスピードも違います。私は昔むかしによくLIVEに行ったり、やったりしていましたが、やはりビデオ(当時はVHSとかベータというビデオカセット)の映像とは全く違う感動がそこにはありました。人間の声もそうです。声帯から生まれた振動が、骨格の共鳴を伴って発せられる声は、スピーカーという振動板から出された音とは異なるものなのです。それゆえに、人と直接に話すことや一緒に行動を共にすることは、感動を伴うのだと思います(以前は人と会うことは当たり前だったので考えたこともありませんでしたが)。そう考えると、講義や演習も対面で出来るようになったことで、感動を伴った学びの多いものになってくるかも知れませんね…って、ちょっと飛躍しすぎでしょうか…(^^)

いずれにせよ、今後はwithコロナの流れで、少しずつこれまでの日常が戻ってくるでしょう。でも、せつかくなら、対面で出来る素晴らしさを噛みしめながら、これまで以上の日常にしたいものですね。

看護学科 糸嶺 一郎

卒業生の方へ

卒業生との交流会等の企画・開催、大学情報を発信するため、勤務先や住所に変更があった時は、必ず電話又は書面もしくは本学ホームページに掲載している「卒業生連絡先等調査」入力フォーム (<https://www.ipu.ac.jp/for-alumni/contact-for-nurse/>) により、お知らせください。



茨城県立医療大学 IPUHS通信 vol.010

発行月：令和5年3月

発行：茨城県立医療大学

問合せ先：茨城県立医療大学

〒300-0394

茨城県阿見町阿見4669番地の2

Tel. 029-888-4000

Fax. 029-840-2301

本誌は年1回発行しております。
本誌に対するご意見ご要望を是非お聞かせください。

✉ shomu@ipu.ac.jp



茨城県立医療大学公式Webサイト

<https://www.ipu.ac.jp/>

茨城県立医療大学 広報 Twitter

[@ipuhs_publicity](https://twitter.com/ipuhs_publicity)



茨城県立医療大学 広報 Facebookページ

[ipuhs.publicity](https://www.facebook.com/ipuhs.publicity)

茨城県立医療大学 広報 Instagram

[ipuhs_publicity](https://www.instagram.com/ipuhs_publicity)

